

東日本大震災 10年

29歳 石巻と共に生きた

18年、がんで亡くなった小学校教員の小田さん



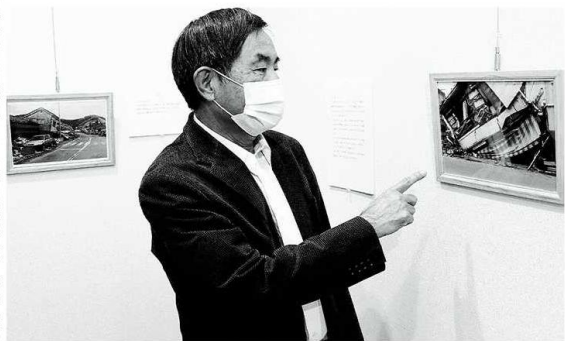
石巻市での支援活動初日の2011年4月23日、津波被害の大きかった地区を見下ろせる高台で写真に納まる太郎さん＝いずれも愛知教育大付属図書館で

愛知教育大（刈谷市）在学中から東日本大震災で甚大な被害が出た宮城県石巻市を中心に復興支援ボランティアとして汗を流し、二〇一八年に二十九歳で亡くなった小田太郎さん。蒲郡市竹谷町出身のこのした写真や活動記録を紹介する展示が二十六日まで、同大付属図書館で開かれている。学生以外にも観覧できる。土、日曜と十一、十二、十七日は休館（都合慶）

太郎さんは〇七年に愛教大へ。「学生の自分には時間に入学。仲間を協力して何かも体力もある。役に立ちたいに取組むのが好きで、同大の催事「子どもまつり」の実行委員を務めたり、フオークソング部でバンドをしたりする青春を過ごした。カメラも趣味で、大学二年の九月、バングラデシュの保育園開設・運営を支援する非政府組織（NGO）の事務局長を務める父孝さん（仮名）に誘われ、現地に一週間ほど滞在。人々の暮らしを撮影した。

一年に震災が起きるとボランティアに志願。四月下旬から宮城県石巻市に入り、主にボランティアの調整役を担った。一月後に帰省したが、一週間と置かず、再び石巻

活動記録や写真 愛教大で展示



太郎さんが撮影した、倒壊した建物の写真を説明する孝さん

夏休みが終わったら戻ってきま。待つてくれね」と約束し、治療生活に。復讐はかなわらず、翌年二月に亡くなった。余命数カ月と言われるようになったところ、石巻市で出会った津波で家族を亡くした女性がモデルの絵本を作ろうと決意。絵は幼少期から得意で、病床で原画を描いた。孝さんが遺志を引き継いで完成させ、刊行した。

会場には携帯電話で撮影した両親に送った石巻市内の生々しい光景、澄んだ瞳と笑顔を見せるバングラデシュの人々

は震災が徐々に忘れられつつあると感じるが、防災教育は依然大切なこと。学生に見てもういっかを感じ取ってほしい」と話す。父子特有の照れゆえか、面を向かい話すことが少なかった長男の足跡を伝える史料を前に、父は一言、「ふふふ」とつぶやいた。「よくやっとな、と思います」



石巻市でがれきの撤去作業を進めるボランティアたちの写真